

# 名所の形成と名所イメージの構築 — 『平家物語』の築島伝説を手掛かりに—

金 智慧 (京都)

## Abstract

Anecdotes and legendary stories about samurai from the Taira clan, which were disseminated by the *Tales of the Heike*, spurred the development of *meisho* (famous places of literary and historic importance) from medieval times, and literary works based upon these stories contributed to the formation of their characteristic image. In other words, the particular image of a *meisho* was formulated in the process of circulation between the original story concerning the place and its spin-off stories that were represented in paintings or the performing arts. In this paper, I focus on the story of Tsukishima (築島), the artificial island constructed by Taira no Kiyomori in front of Owada port, and trace the process which led to the creation of the literary image of Tsukishima by examining the handscroll *Tsukishima monogatari emaki*, the *kōwakamai* play *Tsukishima* and others. Furthermore, I will show how the image of Tsukishima was perceived by the public through the analysis of regional illustrated gazetteers in the Edo period including *Setsuyō gundan* and *Settsu meishozue*.

## 1 築島伝説について

築島（経ヶ島、経の島とも）とは平清盛が大輪田泊（現在の神戸港）の前面に波浪除けのために築いたとされる人工島である。この島の由来を伝える記録のなか最も早い例は『平家物語』（十三世紀末頃成立か）であると推測され、清盛の没後、彼の生前の業績を語る場面で言及されている。

『平家物語』は琵琶法師の語り（平曲）により享受・継承されたことから、多様な異本を持っているが、築島のくだりはその複数の諸本から確認することができる。以下では、『平家物語』の諸本に関する説明を加えつつ、各諸本における築島の記述を比較してみたい。

前述の通り、『平家物語』は平曲という特殊なかたちで伝授されており、それを語る琵琶法師は当道座と呼ばれる集団をなしていた。しかし、その職能集団は鎌倉中期頃、すでに一方流と八坂流（城方流）との二系統に分派していたと推定される<sup>1</sup>。一方流の明石覚一（?～一三七一）により整理された覚一本が後世に広く受け入れられたため、八坂流は傍流とされるものの、覚一が整理する前の原型に近いテキストを持っている特徴を有する。以上の理由から、先に八坂流本の築島の記述を取り上げる。

<sup>1</sup> 『日本古典文学大辞典』（岩波書店、一九八三～八五年）「平家物語」の項（山下宏明執筆）、『国史大辞典』（吉川弘文館、一九七九～九七年）「平家物語」の項（森田武執筆）を参照した。

入道相国の最後のありさまこそ誠におそろしかりけれ共、大かたは神祇を敬ひ仏法を崇め給ふ事も世には又すぐれ給へる人なり。其故は摂津国福原に経の島をつかせ、上下往来の船共の末代の今に至るまで相違なく着事こそめでたけれ。此島と申は衆僧を集め、一切経を石の面に一日一夜に書写し、供養して築籠られけるに依てこそ経の島とは名付たれ。今の兵庫の島これなり。

(『平家物語』巻第六「慈心坊」〈八坂本〉<sup>2</sup>)

以上から、入道相国（清盛）が海上貿易の円滑のために人工島を築造しており、その際、衆僧たちを動員して一切経を刻んだ経石で築き上げたので、経の島と名付けられたことがわかる。一方、覚一本になると、上記の箇所が増補されたうえ、「築島」という見出しが設けられ独立している。

凡そは最後の所労の有様こそうたてけれども、まことにはただ人（筆者注：平清盛のこと）ともおぼえぬ事どもおほかりけり。（中略）又何事よりも福原の経の島ついで、今の世にいたるまで、上下往来の船のわづらひなきこそ目出たけれ。彼島は去る応保元年二月上旬に築きはじめられたりけるが、同年の八月にははかに大風吹き大なみたつてみなゆりうしなひてき。又同三年三月下旬に、阿波民部重能を奉行にてつかせられけるが、人柱たてらるべしなど公卿御僉議ありしかども、それは罪業なりとて、石の面に一切経を書いてつかれたりけるゆゑにこそ経の島とは名づけたれ。

(『平家物語』巻第六「築島」〈覚一本〉<sup>3</sup>)

引用文によると、応保元年（一一六一）二月に築島の工事が始まったが、大風波により揺り動かされ、翌年三月、阿波民部重能を奉行に使わして築造を再開したところ、公卿たちから厄祓いのために人柱を立てる必要があると僉議された。しかし、清盛は「それは罪業なり」と拒否し、一切経が刻まれた石を用いて築島を完成したという。この覚一本を八坂流本と比べてみると、時期が特定され、築造の過程がより詳しく説明されていることが一目瞭然である。さらに、民衆の犠牲を憐れむ清盛の慈悲深さが歴然とあらわれている点で、よりドラマチックな展開になっているといえよう。覚一本は『平家物語』の諸本の中でも善本とされており、それを基にしている諸本も数多くある。覚一本と同系統といわれる高野本や江戸時代に広く読まれた流布本（元和九年〈一六二三〉刊）には、以上の築島の記述が共通してみられており<sup>4</sup>、屋代本と百二十句本の場合、覚一本で特立された灌頂巻（建礼門院の後日談）を有しないが、築島に関しては同様な内容を持つことが確認される<sup>5</sup>。

これまで見てきた諸本は基本的に平曲のために成立したもので、語り本系に分類することができるが、その一方で、琵琶法師の語りの目的ではなく、説話や伝承などを加え、読み物としての性

<sup>2</sup> 古谷 1911: 273-274（国立国会図書館デジタルコレクション〈永続的識別子 info:ndljp/pid/1087779〉から確認した）。凡例によると、底本は内閣文庫蔵の城方流の古写本である。なお、引用に際して適宜句読点を施した（以下、同）。

<sup>3</sup> 市古 1994: 454-455。

<sup>4</sup> 「阿波民部重能を奉行にてつかせられけるが、人柱たてらるべしなど、公卿御僉議有しか共、それハ罪業なりとて、石の面に一切経をかひてつかれたりけるゆへにこそ、経の島とハ名づけたれ」（『平家物語』巻第六「築嶋」〈高野本〉、市古 1974: 72 より）。

<sup>5</sup> 「あはのみんぶしげよし〔阿波民部重能〕ぶぎやうにてつかせられけるが、人ばしらたつべしなどくぎやう〔公卿〕せんぎありしかども、それはざいぐう〔罪業〕なりとて、いしのおもてに一さいきやうをかきてつかれたりけるゆへにこそ、きやうのしまとはなづけられけれ」（『平家物語』第五十五句「ひやうごのつきじま」〈百二十句本〉、高橋 1973: 308 より）。

格を強く持つ延慶本、長門本、南都本<sup>6</sup>といった読み物系の諸本も存在する。読み本系に記された築島の築造過程は、語り本系の内容とおおむね軌を一にしているものの、経石が載った船を沈ませたというより具体的な方法が提示されているとともに、築島の築造開始の時期に異同がある<sup>7</sup>。次節と関わる話であるが、ここではとりわけ人柱について全く言及がないところに注意しておきたい。

入道聞給テ、阿波民部成良ニ仰テ、謀ヲ廻テ人ヲ勸テ、去ジ承安三年癸巳オツキハジメタリシヲ、次年風ニ打失レテ、石ノ面ニ一切経ヲ書テ、船ニ入テ、イクラト云事ッモナク沈メラレニケリ。サテコソ此嶋ヲバ経嶋トハ名付ラレケレ。

（『平家物語』巻第六・十六「大政入道経嶋突給事」〈延慶本〉<sup>8</sup>）

入道聞給ひて、阿波民部大夫成良に仰せて、謀をめぐらし人を勧めて、去ぬる承安三年癸巳歳築始めたりしを、次の年風にうち失はれて、次の年、石の面に一切経を書て、船に入ていくらといふこともなく沈められけり、扱こそこの島をば経島とは名付られけれ。

（『平家物語』巻十二「兵庫島築始事」〈長門本〉<sup>9</sup>）

ところが、延慶本・長門本系統のテキストに基づき、『徒然草』や『義経記』などを参考にして増補されたといわれる『源平盛衰記』（鎌倉中期成立か）の場合は、これまでに概観した『平家物語』の諸本とは異なり、大幅な改変が施されている。

彼島ヲバ阿波民部太輔成良ガ承テ、承安三年癸巳歳築初タリシヲ、次年南風忽ニ起テ、白浪頻ニ扣カバ、打破ラレタリケルヲ、入道情此事ヲ案ジテ、人力及難シ、海龍王ヲ可奉宥トテ、白馬ニ白鞍ヲ置、童ヲ一人乗テ、人柱ヲゾ被入ケル。其上又法施ヲ手向可奉トテ、石面ニ一切経ヲ書写シテ、其石ヲ以テ築タリケリ。誠ニ龍神納受有ケルニヤ、其後ハ恙ナシ。

（『源平盛衰記』巻第二十六「入道非直人附慈心坊得閻魔請事」<sup>10</sup>）

要するに、清盛は築島築造が波風に妨げられたことを海龍王の憤怒によるものと解し、それを宥めるため、一人の童を捧げると同時に経石を築いたと記している点が従来の記述とは完全に齟齬しているのである。これは清盛が人柱を立てることを「罪業なり」とし、彼の憐れみ深さが強調された『平家物語』語り本系の内容に比べると、かなり対照的であることは言うまでもない。そうすると、この童の存在は突然どこから浮上したのであろうか。

<sup>6</sup> 南都本は延慶本・長門本に比し分量が少ない略本式のテキストで、巻第二～五が欠けている。巻第一が平清盛の父忠盛が殿上人になることから始まる平家繁盛の草創期を、巻第六が源頼朝の謀反を起し、平家追討の院宣が下される衰退期を描いていることに鑑みると、おそらく築島のくだりは欠巻に収められていると推測される。

<sup>7</sup> 承安三年（一一七三）という時期は、『帝王編年記』の記録に基づき、訂正されたものであるという指摘がある（市古 1994: 454、頭注一四番）。

<sup>8</sup> 北原・小川 1990: 630–631。

<sup>9</sup> 市島 1906: 415。

<sup>10</sup> 松尾 2007: 61–62。

## 2 築島伝説と松王小児との結合

讃岐地方にはいくつかの人柱説話が伝わっており、その中で香川郡円座村（現在、高松市円座町）出身の松王小児という少年は築島との関連で知られている。以下、その内容を簡単に記してみる<sup>11</sup>。松王小児の祖父は香川郡河辺村にある中田井城の城主中田井民部で、嫡男とともに代々平清盛に仕えていた。このような家柄で生まれたゆえ、松王は清盛の側近に侍童として仕えるようになったという。やがて清盛は大輪田泊の築島の築造に着手するが、難工事が続き困り果てる。陰陽師に占ってもらおうと、海中の龍神の怒りを鎮めるためには、一切経を書いた石と三十人の人柱を埋める必要があると答えた。清盛は直ちに生田の森に関所を設け、人柱に立てる通行人を捉えたが、そこで松王小児が我が身を身替りとして、他の人々は解放してくれるように申し出る<sup>12</sup>。結局、松王は経石とともに入水することで多くの人命を助け、そのあと築島の工事も恙なく完了した。清盛は松王の勇気と善心に感服して少年の菩提を弔う来迎寺（現在兵庫区島上町）を建立し、松王小児像を安置したといわれている<sup>13</sup>。この来迎寺には近年、高松市円座の中井家、同市伏石町の田井家など松王小児の有志の人々により木像が寄贈されたようで<sup>14</sup>、地元ではこの松王小児説話が依然として強く信仰されている様子が見て取れる。

ところで、この松王小児説話の由来に対する柳田国男の見解は注目に値する。氏は「実は久しく行はれた舞の本の「築島」以外に、殆ど拠る所は無かつた」とし、「来迎寺壺名築島寺の松王木像と縁起、兵庫名所記の刊本などが世に知られた為に、自然に異伝が影を潜めるに至つた」と指摘している<sup>15</sup>。これは、言い換えれば、『源平盛衰記』に登場する人柱になった一人の童の存在が特定できる史料はなく、その少年と松王小児とを結びつけたのは幸若舞「築島」にほかならないということになる。幸若舞は十六世紀あたりに完成した舞を伴う語りの芸能で、その演目の一つである「築島」の場合も、室町時代後期にはすでに成立していたと推測される。前節で取り上げた『平家物語』の諸本や『源平盛衰記』に比し、「築島」の成立が遅れていることに疑いの余地はないが、荒木茂は両者の相関関係を否定し、「幸若の「築島」は『平家物語』や『源平盛衰記』を典拠にして出来たのではなく、おそらく松王の人柱に関する唱導が別にあつて、それに基づいて作られたものであろう。『源平盛衰記』が人柱説話を取り入れたのは、むしろこの唱導なり口碑に影響されたことと思われる」と述べている<sup>16</sup>。上記の柳田・荒木両氏の見解を踏まえ、築島伝説と松王小児の話が結束し、定着する過程を時代順に並べてみると以下のようなになるだろう。

- A. 『平家物語』の覚一本に従来見られなかった人柱に対する言及が記されるようになった。
- B. 『平家物語』読み物系のテキストに依拠し増補された『源平盛衰記』には、一人の童の人柱を立て、難工事を成功させたという記述があらわれる（覚一本と『源平盛衰記』の前後関係は不明）。
- C. （元来、讃岐地方には人柱説話を起源とする松王小児の話が伝わっており、これが唱導文学に使用され、広く伝播された。）松王小児を主題とする唱導文学の影響により、

<sup>11</sup> 四国新聞社 1980: 31。

<sup>12</sup> 四国新聞社 1980: 34。

<sup>13</sup> 『摂津名所図会』巻八「経島山来迎寺」の項に「松王小児像 人柱となりし時十七歳の像なり。長一尺。平相国の作なり」と記されている。

<sup>14</sup> 四国新聞社 1980: 35。

<sup>15</sup> 柳田 1940。

<sup>16</sup> 荒木 1979: 377。

『平家物語』の覺一本に人柱の表現が用いられる傍ら、『源平盛衰記』には一人の童を人柱に立てたという話が挿入された。

- D. 『源平盛衰記』に言及された一人の童が松王小児と混同されるようになった契機は幸若舞「築島」であり、後世にこの話型のみが享受されていく。

以上のごとく、『平家物語』に描かれた築島伝説と、讃岐地方を発祥地とする人柱説話は個別に存在していたが、これが幸若舞「築島」によって初めて合体されたかたちで現れるようになった。また、『源平盛衰記』と幸若舞「築島」との直接の影響関係を検証することは難しいが、いずれにせよ幸若舞のため、『源平盛衰記』の人柱になった童が松王小児と混同されるようになったことは確かであろう。すなわち、幸若舞「築島」は『平家物語』や『源平盛衰記』の築島伝説をもとに作られたが、本来原話にはなかった松王小児の話を唱導文学から採用しつつ、別のプロット（名月女の話）を融合させることで、築島伝説の世界をさらに拡大させた。このような過程を経て、築島という場所は文学世界における名所として定着し、さらに、築島伝説の改変・増補を繰り返すうち、新たな文芸作品の創作が促され、やがて身近な物語として民間に伝承されていったのである。

### 3 築島伝説の拡散—絵画・演劇を媒体にして—

築島伝説の定着と拡散において重大な役割を果たしたのは、とりわけ室町～江戸時代に創作された絵画・演劇作品であり、その一例として室町時代に描かれた『築島物語絵巻』から取り上げる。この作品は日本民藝館蔵と根津美術館蔵の二つのバージョンがあると推測され、清盛の命を受けた手下たちが関所で村人を捉え、監獄に入れるなどのモチーフは同様であるが、絵の構図や視点がかなり異なっている（両方とも図録に入っておらず、画像の掲載ができなかったことを断っておく）。一方、江戸時代に制作された長谷川等意作『経ヶ島縁起』（十八世紀成立か）の場合は、築島伝説の人柱の要素に焦点を当てず、むしろ陸地から大岩を運び、海底に鎮めた島の築造方法、そしてそれに動員された民衆の辛苦などを画題としているが、その典拠は明らかでない（【図1】参照）。



【図1】東京国立博物館蔵『経ヶ島縁起』（画像番号: C0006795／列品番号: A-223）  
<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0006795>

また、絵画のみならず、幸若舞「築島」以来、築島伝説を利用した演劇作品が数多く作られるようになり、これらは築島伝説の普及に極めて重要な要因として働いている。幸若舞「築島」は後世の作品構成にも根強く踏襲されていたので、参考のため、以下に梗概を記す。平清盛は人工島を築く計画を練り、陰陽師の安倍泰氏を呼んで吉日を決める。各国から人夫を集めて工事を続けたが、捗らないので、清盛は泰氏を責める。すると、泰氏は三十人の人柱を立てないとこの島は成就できないと隠していた占いの結果を申すので、清盛は人柱を捕えることを命ずる。やがて刑部左衛門国春という修行者が三十人目の人柱に捕らわれるが、この人は名月女という行方不明になった娘を探しているところであった。名月女は乳母と芦屋に出かけたとき、藤兵衛家包という男に出会うが、家包は名月女に一目惚れし、地元の能勢に連れ帰ってしまった。三年が経ち、名月女は偶然同郷の修行者（名月女を恋慕したが、恋が適わず遁世した重友）から父の状況を知らされ、家包が留守している間、父の命乞いのため兵庫へ向かう。家包は名月女の後を追ひ、二人は再会する。人柱の儀式を行う日、家包は牢より駕籠に入れられて移動するが、それを見留めていた名月女と束の間の対面を果たす。清盛は名月女の嘆く姿をみて不憫に思い、国春一人だけを解放させ、儀式を行おうとする。ところが、そこに松王小児という少年が現れ、三十人の人柱の代わりに自分が全てを背負って沈みたいとの意志を告げる。清盛は悦び、国春をはじめ二十九人の人柱を解放する。法華経を書写した経石を用意させて松王とともに沈め、千僧供養まで行い、築島の竣工が成就される。ところで、実は名月女も松王小児も世の常の人ではなく、吉祥天女と大日王の化身であったゆえ、多くの人を助けることができ、また清盛も地蔵薩埵の化身で万民のために築島を築いたのであった。以上、「築島」の梗概のなか、とくに傍線で示した部分、三十人の人柱が必要であるとした陰陽師の占い、人柱に捕まった父国春の命乞いをする名月女といった要素はそれ以降の築島物の定番となった。

江戸時代に入ってから成立した築島物の最も早い例は、延宝年間（一六七三～一六八一）頃、説教天満八太夫が語った説教浄瑠璃「兵庫の築島」であるが、上記の幸若舞「築島」と大差ない<sup>17</sup>。ところが、「兵庫の築島」を改訂した「新板兵庫の築島」（紀海音作、享保元年〈一七一六〉大坂豊竹座初演か）は、幸若舞と説教浄瑠璃を基盤としながらも、重友の役の比重が大きくなり、家包と重友が協力して名月姫の父を人柱から救うという、より複雑な展開になったと同時に、松王小児を清盛の近習として設定することで蓋然性を高めるなどの新しい工夫がみられる。本作は近世演劇における築島物の定型となり、のちに上演された浄瑠璃「太政入道兵庫岬」（竹田小出雲作、元文二年〈一七三七〉十月大坂竹本座初演）もこれを踏襲している。しかも「新板兵庫の築島」は歌舞伎の築島物の形成にも多大な影響を与え、「勝鬃かちどきめぼえげんじ源氏」（文化十三年〈一八一六〉七月大坂中の芝居初演）や「平家評判記」（初代桜田治助作、寛政元年〈一七八九〉七月江戸中村座初演）が上演されている。歌舞伎の場合は、浄瑠璃の築島物に便乗した感が強いが、浄瑠璃の聖地である大坂だけではなく、江戸でも上演されていたことは特記すべき点である。

以上のごとく、築島伝説は初出である『平家物語』に書かれた描写を遥かに超え、原型を母体として派生した多種多様な文芸作品により世界が拡大され、やがて新たなイメージが生み出された。そのうち、おおよそ十七世紀後半から十八世紀にわたり上演された浄瑠璃・歌舞伎劇は、築島伝説の確立と拡散に欠かせない役割を果たしたと看取される。次に、こうして構築された築島の名所イメージが江戸時代にいかに流布され、一般の人々に認識されていたのかを地誌類の記述を通して確認する。

<sup>17</sup> 以下、浄瑠璃・歌舞伎の上演情報は渥美 2010 を参照した。

#### 4 近世期地誌類からみる築島の認識

江戸時代になると、道路の整備や私用の旅の増加により旅行記・名勝記・節用集などが急速に発達し<sup>18</sup>、とくに日本各地の名所を描き、紹介した名所記及び名所画のジャンルの需要も高くなった。このような地誌類の中で、築島はいかに説明されているのであろうか。その最初の例と思われる『福原鬢鑑』（延宝八年〈一六八〇〉序）には、「兵庫ノ中ニ一字ノ堂有、経嶋山来迎寺ト号ス。此寺ニ築嶋人柱ニ入候松王兒童木像影有建武ノ比、脇屋右衛門佐義助陳所又尊氏はヨリ西国へ落給ふ」<sup>19</sup>という記述があり、経嶋山来迎寺に安置された松王小児の木像について言及している。前述した通り、築島築造の際、人柱に立てた童が松王小児であったということは幸若舞「築島」により形成された言説であるゆえ、極論すれば、来迎寺はそれを利用して寺院の歴史を捏造したとみなして差し支えないだろう。にもかかわらず、江戸時代には絵巻『来迎寺縁起』が制作されるなど、もはやそれが既成事実として享受されていたことが窺える。これは『摂陽群談』（元禄十四年〈一七〇一〉上梓）をみても明らかである。

矢田部郡兵庫津にあり。世俗、兵庫の築島と云、此島は、平相国清盛公、初て令築之。大風波を動し、潮逆登て、再元の青海と成れり。重て阿波民部重能奉行して、往来三十人を搦捕、海底に沈て、島成就せんとす。松王兒童諫之、其捕人に命を替り、且は数石を以て、経文を書写し、海中に抛築之、干時応保元年七月十三日、島既成れるの供養あり。因て経之島と称す。猶経島山来迎寺記に詳也。

（『摂陽群談』巻第五 島の部「経之島」<sup>20</sup>）

『摂陽群談』の場合はおおむね『平家物語』の記述に追従したうえ（但し、年月の典拠は不明）、三十人の捕人といった要素は幸若舞・説教浄瑠璃の内容を参考にしたと見受けられる。なお、『摂陽群談』と近い時期に刊行された『兵庫名所記』（宝永七年〈一七一〇〉刊）も酷似した記述になっているが、とりわけ「平相国の家童に松王兒童、いまだ若年といへども、諸人の難を哀み、我一人此島に入、其命に替らんと誓ひ（中略）海内にいりしとかや」<sup>21</sup>とし、松王が清盛の家童として紹介されたところが目を引く。この点は『兵庫名所記』の刊行のあとに上演された「新板兵庫の築島」（享保元年〈一七一六〉）にも採用されており、作者の紀海音が築島物の創作にあたり『兵庫名所記』を参照したか、あるいはそれ以前の文芸作品において、松王が平家に仕えていたという言説が既に形成されていたとみるのが妥当であろう。

他方、『都名所図会』（安永九年〈一七八〇〉刊）の大成功を機に全国各地の名所図会シリーズの制作が活発になったが、その一つである『摂津名所図会』（寛政八～十年〈一七九六～九八〉）には、築島伝説に関する情報が集大成されている。

築島 又の名、<sup>な</sup>経嶋<sup>きやうのしま</sup>ともいふ。今の兵庫津の地なるべし。平相國<sup>せんと</sup>遷都<sup>したころ</sup>の下心ありけるにや、應保元年二月上旬、阿波民部重能、奉行として④畿内の課役五万人を促

<sup>18</sup> 石田 1966 は奈良～平安時代初期に成立した『風土記』以来、七～九世紀も途絶えた地誌編纂が江戸時代に再び始まったと指摘し、それは統治者意識に基づく各藩割拠の時代の産物であったゆえ、全日本という広範囲の地誌編纂にまでは至らなかったと論じている。

<sup>19</sup> 国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース (DOI: 10.20730/100010269) より確認した。

<sup>20</sup> 蘆田 1916: 92 (永続的識別子: info:ndljp/pid/1879464) より確認した。

<sup>21</sup> 植田下省子著。影印本は西島孜哉編『地域文化研究叢書1 兵庫名所記』（武庫川女子大学出版、二〇〇六年）、翻刻は『続々群書類従 第八 地理部』（続群書類従完成会、一九六九～一九七八年）を参照した。

して、塩打山を崩して海面三十餘町を築出す事、築畢れば土砂漂流して元の海となる。其時⑥陰陽博士阿部泰氏に命じて、考させ給ふに、泰氏トて曰、龍神此海底に住て陸地と成る事を惜むなり。これを宥んとならば、⑥三十人の人柱を沈めて其上大小の石に一切経を書寫し、海底に藏めて此嶋を築しめ給はゞ、速に成就すべき由を申す。故に生田森に新関をすへて老若を論ぜず、往還の旅人を擒とす。近隣の村民、これを歎きて訴れば、兵庫の者は此難を免る。今に諺に、兵庫の者也御免あれ、とは此由縁なり。漸三ヶ月にして、三十人を擒として人柱に沈むに極れは、其親族群来りて、悲嘆市上に喧し。平相國もこれを悼み給ひて延る事、五ヶ月に逮べり。こゝに⑦讃州香川ノ城主太井民部の嫡子、松王小児〔今讃州香川郡に苗孫あり。中川氏と改ム〕年十七なるが進み出て曰、願クは臣老人を沈めて三十人を赦し給はゞ、龍神も我カ志願を感應あらんと再三望ければ、平相國大に嘆じて遂に應保元年の末に嶋成つて、築留に經石を入。又石棺に松王を入れて海底に沈む。龍神も感應ありけるにや。築嶋の功なれり。其沈めし所に寺を建られける。今の築嶋寺、これなり。平家物語に經石を沈めし事ありて、松王小児を人柱にしづめし事見へず。

(『撰津名所図会』卷之八 矢田部郡上「築島」<sup>22</sup>)

以上の引用文では、松王小児が平家の家童であったという設定こそ見られないが、『平家物語』『源平盛衰記』が伝える築島伝説を基盤としつつ、その上、絵巻『来迎寺縁起』に描写された陸地から海岸へ岩を運ぶ光景(⑧)<sup>23</sup>、幸若舞・浄瑠璃に挿入された陰陽師阿部泰氏と三十人の人柱説(⑥)、唱導文学から伝播された讃岐地方の松王小児説話(⑦)など、『平家物語』以来拡大してきた築島にまつわる様々な言説が網羅されている。その一方、最後の部分で、『平家物語』には「松王小児を人柱にしづめし事見へず」という文章で締め括っている点からは、作者秋里籬島の実証的態度を窺うことができる。実際、『撰津名所図会』の八年後に出版された『播州名所巡覧図絵』(文化元年(一八〇四)刊)では、「尤平家物語には人柱の詮議有つれども罪業なるべき事也とて、石に經文を書て築れければこそ經が島の名も有けれ。されば松王小児の事確なる書にも見ず、人柱は罪業也とて經の功力をかりたるなれば、松王が事実事とはいひがたし」<sup>24</sup>といい、松王小児の説を積極的に否定する記述がみられる。しかしながら興味深いのは、両者とも『平家物語』から松王小児の説が見られないため、事実とは認め難いという態勢をとりながらも、『撰津名所図会』の挿絵では少年を祀る来迎寺の実景(【図2】参照)を、『播州名所巡覧図絵』の挿絵では松王小児の

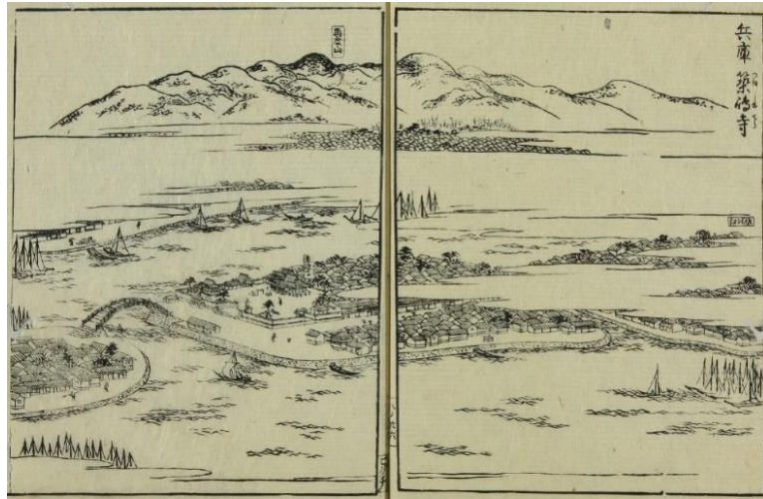
<sup>22</sup> 早稲田大学古典籍総合データベース(請求記号:文庫 30 E0222)より確認した。翻刻の際には適宜句読点を施し、割注は〔 〕で表記した。なお、旧字体は原型のままに表記した。

<sup>23</sup> 未見であるが、西尾市岩瀬文庫蔵『摂州兵庫築島寺略縁起』の冒頭部には「夫当寺の創造を尋るに人王七十八代二条院の御宇平大相国帝都を福原に移さんとて五条大納言国繩卿に命じて地形を点検し九条をつもるに三条たらざりければ畿内の民役五万人を催して塩打山を崩して海面三十餘町を築出事二度なるに...」(岩瀬文庫古典籍書誌データベースの書誌情報より)と記されており、『撰津名所図会』の典拠の一つであったと看取される。一方、築島築造の際に塩打山を崩した岩を使用したという説の起源は定かでないが、絵巻『来迎寺縁起』の図柄と『摂州兵庫築島寺略縁起』の説明を見る限り、来迎寺(築島寺)縁起により形成されたのではないかと推測される。

<sup>24</sup> 国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース(DOI: 10.20730/200006255)より確認した。

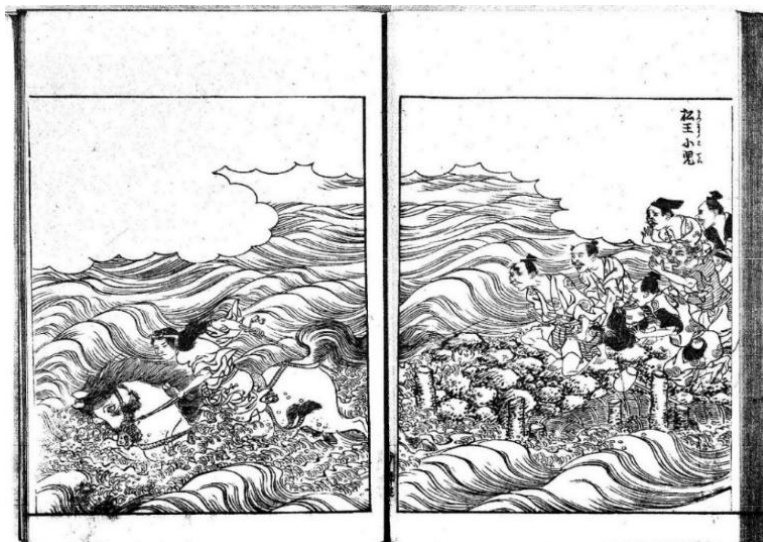


想像画（【図3】参照）を載せるなど一見矛盾した創作態度を示していることである。以上に鑑みると、『撰津名所図会』『播州名所巡覧図絵』を含めた近世期の地誌類が文学の再生産を促進させたのは、地誌であるとはいえ、史実・地理情報を伝えるのに留まらず、文学の性格も兼ねていたためではないだろうか。事実上地誌の体裁を持ちながら、現実と文学・歴史の世界を交差して様々な言説を盛り込んでいたのである。そして築島の名所イメージの形成に関して言えば、『平家物語』『源平盛衰記』を土台として中世・近世の文芸作品により拡張された築島伝説は、近世期の地誌類を通して一定のかたちで収束し、定着するようになったといえよう。



【図2】『撰津名所図会』巻之八 矢田部郡上  
「兵庫築島寺」

([https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko30/bunko30\\_e0222/bunko30\\_e0222\\_0010/bunko30\\_e0222\\_0010.pdf](https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko30/bunko30_e0222/bunko30_e0222_0010/bunko30_e0222_0010.pdf) 〈10/28 コマ〉)



【図3】『播州名所巡覧図絵』巻一「松王小児」

(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200006255/viewer/37> 〈37 コマ〉)

## 5 おわりに

『平家物語』を通して生成・伝播された築島伝説は、それをモチーフにする中世以降の美術・芸能作品によりいわゆる名所と認識されはじめ、築島にまつわる言説と文芸作品によって派生された新たな物語との相互作用のなか、やがてその世界が拡大されていった。それに伴い、築島の持つイメージも平清盛が大輪田泊の前に築造した人工島という単純なカタチから、松王小児が自らを犠牲にして多くの人々を助けた話や、人柱として捕まった父を救助した名月姫の話などが加わり、重層化するようになった。このように重層化した築島のイメージとそれに対する民衆の認識に関しては、『兵庫名所記』、『摂津名所図会』といった近世期の地誌類に著しく反映されていたことを確認した。

ところが、築島伝説は近世期の時点で完成し、化石化したものではなく、それが再び同時代の地誌類や文芸作品により刺激され、新たな文学の再生産を促したことは注目すべき現象である。例えば、仏書『勅化因縁兵庫築島伝』（天明二年〈一七八二〉刊、円信法師作、全五巻）は、築島成就の由来を核に、清盛の出自からその最期までを記すもので、とりわけ多くの人柱の命を救った松王小児が実は如意輪観音の化現であり、そのため来迎寺と松王小児の木像が造られたという巻四・巻五の内容を見る限り、来迎寺縁起の性格が強いものと看取される<sup>25</sup>。さらに、合巻『松王丸明月姫昔語兵庫之築島』（文化七年〈一八一〇〉刊、式亭三馬作・二世北尾重政画）は、上記の『兵庫築島伝』をそのまま本文に利用しつつ、『摂津名所図会』の見開きの挿絵をも転用していることが知られる<sup>26</sup>。また時代が下るが、近代に入ってから、明治二十八年（一八九五）、『早稲田文学』に脚本「人柱築島由来」（湖泊堂作）が連載される傍ら<sup>27</sup>、同四十二年（一九〇九）十月東京歌舞伎座では「経ヶ島娘生贄」（榎本虎彦作）が上演された。以上の断片的な事象からも、築島伝説が『平家物語』の初出以来、実に絶え間なく再構築され、様々なカタチの文学を生み出した過程の一端を覗き込むことができるだろう。

## 文献目録

### 一次文献

- ASHIDA, Koreto 蘆田伊人 (1916): *Dainihon chishi taikai dai-9-satsu. Setsuyō gundan* 大日本地誌大系 第9冊 摂陽群談. Tōkyō: Dainihon chishi taikai kankōkai.
- FURUYA, Tomoyoshi 古谷知新 (1911): *Heike monogatari fu Jōkyūki* 平家物語 附承久記. Tōkyō: Kokumin bunko kankōkai.
- ICHIKO, Teiji 市古貞次 (1974): *Takanobon Heike monogatari 6* 高野本平家物語 六. Tōkyō: Kasama Shōin.
- ICHIKO, Teiji 市古貞次 (1994): *Nihon koten bungaku zenshū 45. Heike monogatari 1* 日本古典文学全集 45 平家物語 1. Tōkyō: Shōgakukan.
- ICHISHIMA, Kenkichi 市島謙吉 (1906): *Heike monogatari Nagatobon* 平家物語長門本. Tōkyō: Kokusho kankōkai.

<sup>25</sup> 森田・高瀬 2005。

<sup>26</sup> 井上 1984。

<sup>27</sup> 『早稲田文学』第八十号（明治二十八年一月）に第一段、第八十一号（同年二月）に第二、三、四段、第八十二号（同年三月）に第五段（畢）が収録されている。

- KITAHARA, Yasuo 北原保雄, OGAWA, Eiichi 小川栄一 (1990): *Enkeibon Heike monogatari. Honmonhen jōkan* 延慶本平家物語 本文篇 上. Tōkyō: Benseisha.
- KUROKAWA, Shin 黒川真道, HOTTA, Shōzō 堀田璋左右, WATANABE, Kai 渡辺魁 (1969–1978): *Zokuzoku gunsho ruijū dai-8. Chiri-bu* 続々群書類従 第八 地理部. Tōkyō: Zoku gunsho ruijū kanseikai.
- MATSUO, Ashie 松尾葦江 (2007): *Genpei Jōsuiki 5* 源平盛衰記 五. Tōkyō: Miyai shoten.
- TAKAHASHI, Sadaichi 高橋貞一 (1973): *Heike monogatari hyakunijukkubon* 平家物語 百二十句本. Kyōto: Shibunkaku.

## 二次文献

- ARAKI, Shigeru 荒木茂 (1979): *Tōyō bunko 355. Kōwakamai 1* 東洋文庫 355 幸若舞①. Tōkyō: Heibonsha.
- ATSUMI, Seitarō 渥美清太郎 (2010): *Kabuki shiryō sensho 11. Keitōbetsu kabuki gikyoku kaidai* 歌舞伎資料選書 11 系統別歌舞伎戯曲解題. Tōkyō: Nihon geijutsu bunka shinkōkai.
- INOUE, Keiji 井上啓治 (1984): “Shikitei Sanba no bungaku keitai. Shoki yomihon ‘Hyōgo Tsukishima den’ oyobi gōkan ‘Mukashigatari Hyōgo no Tsukishima’ o megutte 式亭三馬の文学態度—初期読本『兵庫築島伝』及び合巻『昔語兵庫之築島』をめぐって—”. In: *Kokubungaku kenkyū* 国文学研究 84: 68–77.
- ISHIDA, Ryūjirō 石田龍次郎 (1966): “Nihon ni okeru chishi no dentō to sono shisōteki haikai 日本における地誌の伝統とその思想的背景”. In: *Chirigaku hyōron* 地理学評論 39/6: 348–356.
- MORITA, Masaya 森田雅也, Takase, Makito 高瀬麻規人 (2005): “Honkoku ‘Hyōgo Tsukishima den’ sono ichi 翻刻『兵庫築島伝』その一”. In: *Nihon bungei kenkyū* 日本文藝研究 57/2: 47–62.
- SHIKOKU SHINBUNSHA 四国新聞社 (ed.) (1980): *Sanuki jinbutsu fūkei 3. Kohō to gun’yū* 讃岐人物風景 3 弧峰と群雄. Tōkyō: Yamato gakugei tosho.
- YANAGITA, Kunio 柳田国男 (1940): “Matsuō kondei no monogatari 松王健兒の物語”. In: *Imo no chikara* 妹の力. Tōkyō: Sōgensha: 175–204.